AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報　第38号

空中回廊

この展覧会で色彩の探求検証！[印象派を超えて]／会員のひろば／友の会発足20周年によせて／愛知県美術館コレクションから[松本陽子《光は荒野の中に拡散している》]／友の会活動紹介

松本陽子《光は荒野の中に拡散している》(部分)1993年

○この展覧会で色彩の探求検証！

印象派を超えて ―点描の画家たち

2月25日(火) から 4月6日(日) まで開催

今回の企画展「印象派を超えて」について、担当の中西学芸員にお話をうかがいました。

――今回の展覧会の特徴はなんですか

特徴としては、サブタイトルにもなっていますが、点描の作品を集めたとても珍しい展覧会だということですね。今回はクレラー=ミュラー美術館の所蔵する作品をメインに、国内の作品も展示します。

――今回の展覧会の見どころはどういったところですか

もちろんクレラー＝ミュラー美術館の名品です。ゴッホを楽しみにしておられる方は多いと思います。夭折したスーラは作品が少ないため、たくさん見る機会があまりないのでぜひ堪能していってください。オランダ・ベルギーの点描の作品も、日本ではなかなか見るチャンスがありません。

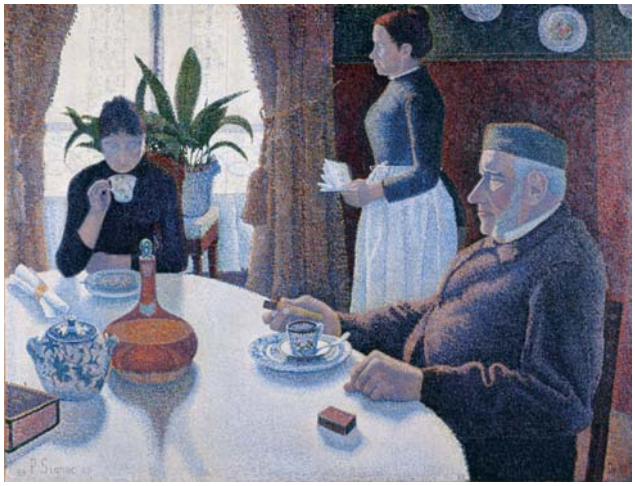
――どのような構成で展示しているのでしょうか

全体を5章に分けて展示しています。

第1章は、点描へとつながる要素に注目してください。印象派の筆触分割の紹介をしています。

第2章は、主にスーラ、シニャックなど、フランスの新印象派の紹介です。スーラは若くして亡くなりますが、後を引き継いだシニャックは、スーラの探求した色彩の分割と点描法を理論的に表現することで、分割主義を広くアピールすることに成功しました。

ジョルジュ・スーラ《ポール=アン=ベッサンの日曜日》1888年 ＊



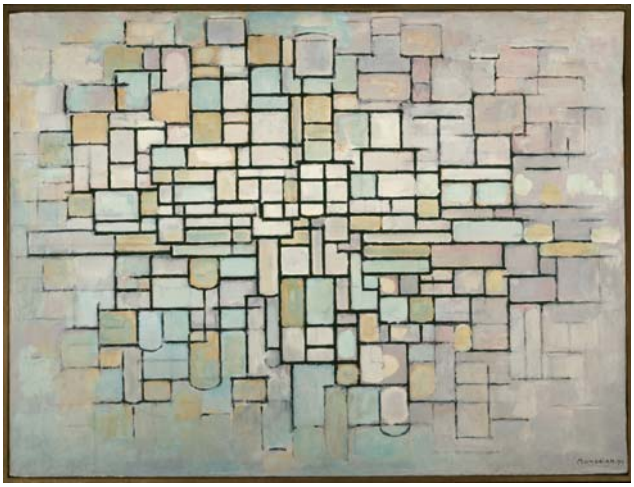
ポール・シャニック《ダイニングルーム 作品152》1886-87年 ＊

第3章は、ゴッホを中心に構成しています。ゴッホは手紙の中でも、新印象派の分割主義や点描などについて書いています。実際に点描や補色を起用して描いた作品もありますが、時間のかかる点描は制作スタイルに合わなかったようですね。そしてゴーギャンにも点描を試した作品がありますが、結局自分のスタイルに取り入れることはなく、次第に彼独自の様式を確立しました。そしてまたこのコーナーで重要なのは、1905年のサロン・ドートンヌで誕生したフォーヴィスムです。大胆な原色の使用には点描が大きな影響を与えました。

第4章では、この展覧会の特徴のひとつでもあるのですが、オランダ・ベルギーの作家を紹介しています。これらの地域では、作家同士の交流を通じて点描技

フィンセント・ファン・ゴッホ《レストランの内部》1887年 ＊

アンドレ・ドラン《コリウール港の小舟》1905年 大阪新美術館建設準備室蔵



ピート・モンドリアン《コンポジション No.II》1913年 ＊
＊ クレラー＝ミュラー美術館蔵
©Collection Kröller-Müller Museum,Otterlo,the NetherLands

法が流行し、独自の広がりを見せました。

最後の第５章は、モンドリアンです。赤・黄・青の三原色と黒い線による抽象絵画で有名ですが、同郷のヤン・トーロップと交流を持つことによって、点描にも高い関心を示しました。残念ながらその頃の作品は今回展示されませんがその後、新造形主義へと移行したモンドリアンは、具象から抽象への移行の過程と色彩の関わりがみられる重要な作家です。

――おすすめの作品を教えてください

シニャックの《ダイニングルーム　作品152》は、作家の中での位置づけが高い作品です。色調は地味ですが、新印象派のクールな視線がとてもよく映し出されています。マクシミリアン・リュスの《鋳鉄工場》は、当時の労働者の過酷な環境を描いていますが、色彩の使い方が魅力的な一点です。点描の使い方が非常にうまい作品となっています。2005年の「ゴッホ展―孤高の画家の原風景―」の時も展示されたゴッホの《レストランの内部》も、点描の視点で見るとまた違って見えるのではないでしょうか。

……編集スタッフ感想……

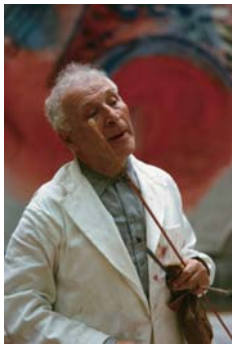
新印象派は、あまり独自に展覧会を開催されることが多くありません。そんな中で単独でしかも点描に限定して開催される今回の展覧会は、貴重な機会と言えるでしょう。中西学芸員ありがとうございました。（喜田 泉）

次回展覧会　シャガール展　　4月17日(木)～6月8日(日)

“色彩のチカラ”の次は…色彩の魔術師が登場！

「印象派を超えて―点描の画家たち」展で色彩の力を堪能した後は、色彩の魔術師として知られる画家、マルク・シャガールの作品をお楽しみください。

シャガールは日本でも特に人気の高い画家で、展覧会も数多く開催されていますが、この展覧会ではズバリ「知られざるシャガール」に光を当てます。



パリ・オペラ座天井画を制作中のシャガール パリのゴブラン織工場にて 1964年（撮影：イジス）
© IZIS Bidermanas　By courtesy of the Comité Marc Chagall

彼はエコール・ド・パリの画家として名声を確立した後、第二次大戦後には数々のモニュメントの仕事を引き受けました。モニュメントというのは、ここでは公共的な建造物の仕事を指しています。

劇場や大聖堂など、多くの人の目に触れる記念碑的な作品は、必然的に堅固な素材を用いた巨大な装飾を必要とします。それゆえに自らのイメージをそうした新しい技法や形式に焼き付けようとするシャガールの作品には、常に新しいチャレンジが伴います。

どんな素材に向き合おうとも自分の世界観を強烈に展開していく、シャガール。この展覧会では彼が世界中に遺した挑戦の軌跡にご注目ください。　(学芸員 石﨑尚)

○会員のひろば1○

懇親日帰りバスツアー

◎懇親日帰りバスツアー

10月6日、友の会の懇親バスツアーで京都、奈良のお寺へ行ってきました。

いざ出発！

村田館長、小林会長からのご挨拶後、いつも通りの自己紹介。顔なじみの方々や初めてご参加くださった人、様々いらっしゃいました。親睦の第一歩でしょうか、ひとりまたひとりと顔なじみが増えていくうれしい時間です。村田館長から仏教美術の見かた、考え方のお話があり、これから始まるお寺巡りツアーへのワクワクがどんどんふくらんでゆきます。

訪れたのは京都といっても奈良に近い浄瑠璃寺・岩船寺、奈良といっても京都に近い円成寺。いずれも秋の風景がよく似合う静かなところです。木々や田畑の多い岩船寺へ続く道はとても細く、カーブも多く、道を譲ってくれるたびに対向車のドライバーへ感謝の念を抱き、乗務員さんのテクニックへの敬意が湧き、バス車内の空気はほのぼのとしていきました。

岩船寺に着くと本堂でご住職にお話を伺いました。三重塔内部の仏画を観たり、あまのじゃくを探したり。

岩船寺での集合写真

また境内ではひっそりとたたずむ石仏、花々の優しさを感じました。ここで集合写真をパチリ！

とろろ定食

とろろのお昼をいただいて、浄瑠璃寺へ。ずらりと並んだ阿弥陀様、鮮やかに色彩の残る吉祥天、木彫の「おそなえもの」のお話も住職から聞かせていただきました。実は木村コレクションにも「おそなえもの」があるそうです。

円成寺まで、バスは美しい緑の中を走りました。本堂の柱には、美しく楽器を奏でる天女たちが描かれていました。当時はどれほど鮮やかであったであったろうと想像し魅了されました。多宝塔の扉を開いていただき、若き日の運慶作《大日如来》の横顔も観ることができました。また少しだけ色づいた紅葉にも趣が感じられ、カメラを向ける会員もいました。

村田館長の解説に聞き入る

心配していた台風も近づかず、暑いくらいの良いお天気でした。企画者としては感謝感謝の一日でした。村田館長、会員の皆様、ありがとうございました。次回のイベントも楽しみましょう！　(O.E.)

○会員のひろば2○

友の会講座「西洋美術における理想風景の系譜」
友の会特別鑑賞会「あいちトリエンナーレ2013」

友の会講座『西洋美術における理想風景の系譜』名古屋大学大学院 栗田秀法教授

昨年12月15日、およそ5年ぶりに栗田秀法教授が友の会講座でお話をしてくださいました。

理想風景は、現在の我々が写生で描くような「目に映るそのままの景色」の絵画ではありません。風景を理想化して描き、神・人間・社会それぞれの関係を考えさせる、思索を促す絵だったのです。例として、ルーヴル美術館所蔵のニコラ・プッサンが描いた4つの作品《春：地上の楽園》《夏：ルツとボアズ》《秋：約束の土地から持ち帰った葡萄の房》《冬：大洪水》の観かたを解説していただきました。聖書の物語、描き込まれた図像の意味、作品の並べ方…。美しい風景には、観る者の知識を試すようなものが織り込まれていたのです。

栗田先生のお話に聴き入る会員

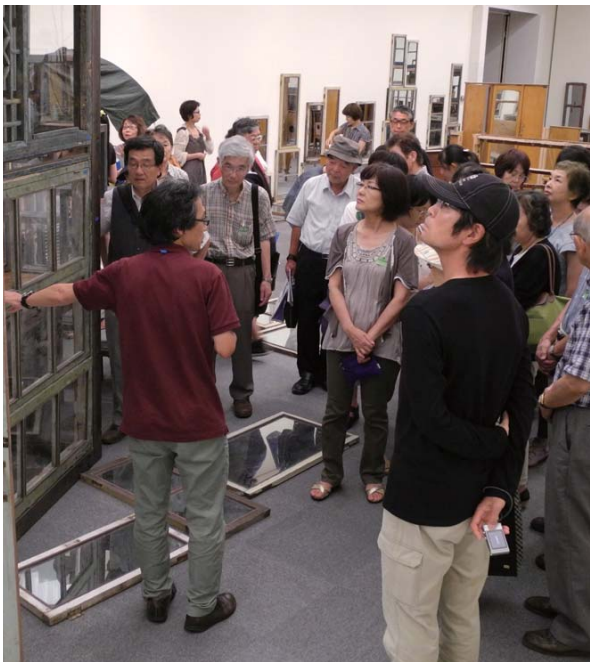
理想風景の歴史と、ピート・モンドリアンが代表作を描くまでの道のり。このふたつが栗田先生のお話で繋がったときの感動は、この先も忘れることはないでしょう。 (M.T.)

◎友の会特別鑑賞会「あいちトリエンナーレ2013」

昨年8月21日、愛知県美術館と名古屋市美術館においてトリエンナーレ特別鑑賞会が開催されました。講師はキュレーターの拝戸雅彦氏。

ギャラリートークで拝戸氏は、「普段見ているもののどこかかが一時的に変わることによって、普段とは違う見え方がします。」と、アーティストの様々な試みについて解説されました。距離のあった現代美術が、優しい物の見方を教えてくれていることを今回の鑑賞会で知り、興味を持ちました。そこに共感された方も多かったのではないでしょうか。 (T.K.)

(上)ヤノベケンジの作品を解説する拝戸氏　(下)屋外の作品を鑑賞する



作品について熱く語る拝戸氏

○20周年企画○

友の会発足20周年によせて　宮崎 玲子

宮崎玲子さんは、愛知県美術会友の会の会報「空中回廊」の創刊メンバーであり会長、顧問も歴任されました。今回、友の会発足当初からの会員である宮崎さんに友の会活動に関する思いをよせていただきました。

宮崎氏

友の会の会報、創刊号を出してみる。もうあれから20年近く経ったのかとしみじみ思う。友の会初代会長の井関弘太郎先生は「芸術は総合なり」とご自分の思いを述べられ、浅野初代館長は「新しい友の会」への期待を語られている。私も初めての鑑賞会の楽しさや嬉しさを書かせていただいた。

村田学芸員(現在の館長)から友の会の役員を依頼され、美術を愛する皆さんのお役に立てればとお引き受けしたものの、当時は社会的な地位のある方が大半であった。また友の会としての独立した事務局もなく、県美の事務局に間借りしていたようなものだった。

思い起こせば、当時の村田学芸員には本当にお世話になったと思う。先ず友の会の機関誌を発行することと、特別鑑賞会を開催すること。これらは村田学芸員がいらした時に始まり、今でも友の会の基幹となっている。

それとは別に、会員同士が楽しんで親しくなれる催しも企画していただいた。ひとつは懇親会。最初のメニューを今でも覚えている。それからロビーでのコンサート、豪華な蒔絵を施したチェンバロの演奏会を、ワインを手にしながら聴き入った宵は、今思えば夢のようなことだった。その後も展覧会の内容に合わせていろいろな催しをした。音楽会は弦楽四重奏から歌曲、ジャズ、民族音楽等、それに韓国宮廷舞踊。大好評だったのは和泉流狂言、そして長唄。愛知県美術館友の会の独自性をうちだしたいという思いをこめて様々な企画を立てていった。

2005年の狂言鑑賞会

そんな時代を過ぎ、現在は会員相互の交流はバス旅行に落ち着いたようだ。友の会の歴史を振り返ると、美術を愛する会員をこれからもっと増やし、美術館と共に歩んでゆく道を皆で考えてみたいと思っている。

愛知県美術館友の会は、団体も入会していただくことができます。　現在ご入会いただいている団体は、名古屋芸術大学、株式会社MARUWAの2団体です。ご協力ありがとうございます。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

名古屋芸術大学
大学院音楽研究科/音楽学部/人間発達学部
〒481-8503 愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
TEL(0568)24-0315 FAX(0568)24-0317
大学院美術研究科/美術学部
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
TEL(0568)24-0325 FAX(0568)24-0326
大学院デザイン研究科/デザイン学部
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
TEL(0568)24-0325 FAX(0568)24-0326

ceramics innovation MARUWA

株式会社MARUWA
〒488-0044 愛知県尾張旭市南本地ヶ原町三丁目 83 番地
TEL (0561) 51-0841
http://www.maruwa-g.com
株式会社MARUWA SHOMEI
〒110-0015 東京都台東区東上野一丁目1番12号栗橋ビル
TEL (03) 5812-0870
http://www.maruwa-shomei.com
株式会社MARUWA QUARTZ
〒963-7704 福島県田村郡三春町大字熊耳字大平 7-1
TEL (0247) 62-0012
http://www.maruwa-g.com

○愛知県美術館コレクションから―深く知ると、もっとみえてくる○

松本陽子《光は荒野の中に拡散している》

（編）ここでご紹介する所蔵作品《光は荒野の中に拡散している》を、本会報表紙に掲載しました。

松本陽子《光は荒野の中に拡散している》1993年　アクリル絵具、画布 188.0x273.0cm

まるで雲の中に入り込んだような、ぼうっとしたピンクの世界が画面いっぱいに広がっています。松本陽子さんご本人は、このような自分の絵画を「表現主義的朦朧絵画」と呼んでいます。ピンクの朦朧絵画は松本さんのトレードマーク。なかでも当館所蔵のこの作品は、ご本人もお気に入りの傑作です。松本さんはエネルギーの固まりのような方で、この作品を見ているといつも、画面に満ちた松本さんのパワーが自分に乗り移ってきて、元気な気持ちが心の底から湧いてきます。

松本さんは東京藝術大学在学中の1956年、日本橋高島屋で開催された「世界・今日の美術」展でサム・フランシスなどの作品を見て、抽象絵画に強い関心を持つようになりました。はじめ、油彩で抽象絵画に取り組みましたが、油絵具の力強さに負けてしまっていたそうです。そんな中、1960年代後半にアメリカに一年ほど滞在する機会があって、その時に新しい水溶性のアクリル絵具の存在を知りました。このアクリル絵具との出会いが松本さんの絵画を大きく変えることになります。

松本さんは、日本の風土の中では油彩は日本人には根本的に合わないと感じていました。そこに、アクリル絵具というものがあることをアメリカで知った。でも、アメリカ人がやるようにアクリル絵具を使っても意味がない。そう思った松本さんは帰国後、日本人としてのアクリル絵具の使い方を模索していきます。そうして水墨画の伝統なども取り込んだ独自の手法を生み出しました。

キャンバスを床に置いて、その上に水で薄く溶いたアクリル絵具を載せる。そして、そのアクリル絵具を布で拭き取りつつ薄く広げたり、筆で描き加える。そういったプロセスを繰り返し、水溶性のアクリルならではの絵具の薄い重なりによって、柔らかな光に包まれた雲のような朦朧とした独創的な空間を松本さんは作り上げていきました。

1936年生まれの松本さんは、いま70代後半。ハードな制作を続けているため、この頃はお会いすると、身体が痛いとよくおっしゃっています。でも、そんな言葉の裏には、まだまだやり足りない！自分の求める絵画に向かってこれからもがんばって描いていくぞ！という強いご意思が感じられます。近年はピンクを離れて、緑や白を主調とした新しい仕事に精力的に取り組んでいらっしゃいます。そのご活躍からますます目が離せません。　(主任学芸員　大島 徹也)

■学芸員の横顔

大島 徹也（おおしま・てつや）
愛知県美術館主任学芸員。
趣味は旅行。昨年ピカソの調査で行ったバルセロナの街に感激。ピカソも通った酒場「四匹の猫」で、心は百年前にタイムスリップ！

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

■愛知県美術館専門委員会について

例年、年度の初めに「愛知県美術館専門委員会」が開催され、美術館の活動についての報告や意見交換などが行われています。友の会からは会長が委員として出席していましたが、今年度は会員の方々にも傍聴する機会をいただきました。愛知県美術館が友の会を大切にしていただいていることに感謝し、参加した方の報告を掲載させていただきます。

＜美術館専門員会を傍聴して＞

私を含め４名の会員が傍聴しました。委員会は近隣の美術館館長などの10名（うち出席は7名）により構成されていました。

はじめに美術館事務局による昨年度の活動状況及び今年度の活動計画の説明があり、その後、委員よりさまざまな質問がでました。芸術文化センターの建物外壁の展覧会告知利用、現代アートの所蔵、視覚障害者向けブックの反応、そして私が関心をもった防災の取り組みについて、などです。

初めて耳にする活動もあり美術館活動の幅の広さに目を見張りました。また、さまざまな取り組みへの賞賛の言葉を聞き、愛知県美術館の素晴らしさを再認識し誇りに思うとともに、サポートする友の会会員として身が引き締まる思いでいっぱいになりました。

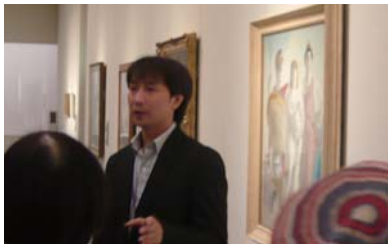
貴重な経験をさせていただけたことに心より感謝いたします。　（塚本 薫子）

■友の会活動紹介

期間　2013年11月-2014年2月　　★中面で紹介

「アイチのチカラ！」展

12月 特別鑑賞会(昼・夜)



「アイチのチカラ！」展担当は大島主任学芸員。愛知ゆかりで日本や世界で活躍の作家が意外に多勢。愛知はスゴイ。友の会ゆかりの作家6人の13作品を初めて同時に鑑賞できたのもコレクション展のおかげ。(H.A.)

12月 友の会講座(名古屋大学大学院 栗田秀法教授) ★
「西洋美術における理想風景の系譜」

定例活動

所蔵品管理　のべ7回（毎月第2・第4水曜日に活動）
収蔵作品の台帳作成補助、展示用品の洗浄、収納備品の作製、
木村定三コレクション風呂敷の洗浄・補修手入れ
発送　のべ2回　　受付　のべ2回
編集会議　1回　　ホームページ　随時更新

友の会も展覧会の広報活動を支えています！

美術館につながる地下通路にはバナー広告があります。

あまりご存知ない方もいらっしゃいますが、友の会活動の一環でその費用を負担しています。

次回美術館にお越しの際は、是非ご確認ください！

これからの展覧会のご案内

印象派を超えて — 点描の画家たち
2月25日(火) →4月6日(日)

シャガール展
4月17日(木)→6月8日(日)

コレクション企画 あなたのリアル、わたしのリアル。
6月20日(金) →7月21日(月・祝)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

●10階愛知県美術館受付
●友の会事務局(火・木・土 10:00-16:00)
052-971-5511(代) 内線347
tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編集後記

プーシキン美術館展で展示されていたゴッホ《医師レーの肖像》はとっておきの一枚。ゴッホに贈られた絵をレーは好まず売却しますが、気に入らない所を探す楽しみが良い。ところで、ベスト10の行方、こちらは大変気になります。　(T.K.)

□編集　松下智子/冨永晃一/大矢真美代/喜田泉
小林克敏/平松章子/水野愛子/宮崎玲子/森健次
□協力　愛知県美術館
□発行　2014年3月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知芸術文化センター内
TEL　052-971-5511(代)内線347
FAX　052-971-5617
E-mail　tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ　http://www-art.aac.pref.aichi.jp

Art Direction : Masaru NAKADA　Design & Layout : Aiko MIZUNO / Tomomasa NARITA